



しゅごキャラ！二次創作

デートにも個人差があります

はなび

無意識にイチャイチャしすぎな空歌&初々しいイクあむ

「これ、もらったんだけど。今度の日曜日、一緒に行かない？」

緑にもらったチケットを差し出ししながら、亜夢は幾斗にそう言った。

そのチケットを受け取って、幾斗はじっと見つめる。それから机の引き出しを開け、中から2枚のチケットを取り出した。

「俺も持ってるぜ、それ」

「え？」

幾斗が差し出したチケットを受け取り、亜夢は自分のものと見比べた。まったく同じものである。

「どうしたの、これ？」

「親父にもらった」

背伸びをしながら、幾斗はベッドに横になる。

「じゃ、これどうしようかな」

亜夢が迷っていると玄関が開き、ただいま、という声とお邪魔します、という2つの声が聞こえた。歌唄と空海である。

あ、と思いついたように、亜夢は幾斗を見た。

「これ、歌唄と空海にあげてもいい？」

幾斗が笑顔で頷いたのを見て、亜夢は幾斗の部屋のドアを開けた。

「お帰り、歌唄、空海」

「あむ。来てたの」

丁度階段を上り終えた歌唄は亜夢に気づき、笑顔を見せた。パタパタと走り寄り、亜夢はチケットを歌唄に渡す。

「今度の日曜日、一緒に行かない？」

「これ、今度できたところ？」

受け取ったチケットを見ながら、歌唄が聞いた。そうだよ、と亜夢が答えると、空海がにこやかに口を開く。

「へえ、いいじゃん。行こうぜ、歌唄？」

「そうね」

空海に、歌唄も笑顔で返す。とても自然で、穏やかな空気だった。



日曜日。亜夢は、幾斗と2人でテーマパークへ向かっていた。

「……」

幾斗の半歩後ろを歩きながら、亜夢は、じっと幾斗の手を見つめている。手を、繋ぎたい。でもそんなことは恥ずかしくて、口が裂けても言えない。

「あむ」

振り返り、幾斗は亜夢に向かって手を差し出す。

「な、なに……？」

「手。繋ぎたいんだろ？ そういう顔してるぜ？」

「！」

一番気づかれなくなかったことに気づかれてしまい、亜夢は耳まで紅潮させた。

「そ、そんなこと言ってないし！」

「顔に書いてある」

「か、書いてないっつの、バカ猫っ」

顔を見られないように、亜夢は足早に幾斗の前を通り過ぎる。ふう、と息を吐いて、幾斗は後ろから亜夢の手を掴んだ。

「じゃ、俺が繋ぎたい」

優しく微笑まれ、亜夢は言葉を失くす。幾斗は亜夢の手に自分の指を絡ませて、足を動かし始めた。

すごく、悔しい。悔しいけれど、すごく嬉しい。亜夢がどんなに意地を張っていても、幾斗はそれに気づいて、亜夢がしたいことをしてくれる。そんなかわいくない意地さえも、愛おしいと包み込んでくれる。

「……ごめん。意地っ張りで」

勇気を出して、亜夢は思いを言葉にした。嫌われたくない。その一心で。

「夜は素直なのにな」

「!!」

ぱっ、と勢いよく手を離し、亜夢は頬を膨らませた。そうして、大っ嫌いっ、と捨て台詞を吐いてから、逃げるように走って行く。

くつつつ、と笑いながら、幾斗はそんな亜夢を追いかけた。

「遅かったなあ」

「出た時間、あたしと一緒にだったのに」

不思議そうに、歌唄が幾斗にそう言った。

「ああ。だってあむが……」

「うっさい、バカ猫！」

幾斗の言葉を亜夢が制して、なにも言わせない。

あれからしばらく追いかけてこをして、ようやく手を繋いでテーマパークまで来ることができたのだ。

「ま、いっか。とっとと中に入ろうぜ」

「そうね」

自然に、するっと歌唄は空海の腕に自身の腕を絡めさせた。きっと、そうすることが当たり前で、いつも2人で歩くときにはそうしているのだろう。自然にそうできる歌唄が、羨ましい。

「どっから回る？」

「つーか、別行動にしようぜ。また昼にでも落ち合うようにして」

空海の間いに、幾斗がそう答えた。

「そうね。じゃあ、12時にここで」

「わかった」

歌唄が手を振り、そして空海と2人でテーマパークの奥へと姿を消した。

「あむ」

ふう、と息を吐いて、幾斗は亜夢を見る。

「言いたいことがあるなら、言えよ？」

「なにもないし」

素っ気なく、亜夢は答える。

「ったく。かわいいげのねー女……」

幾斗の言葉が、深く亜夢の胸に突き刺さる。

こんな言葉を言わせてしまったのはほかでもない自分なのに、涙が出てくる。かわいいことを言って甘えることもできない。素直になれない自分を、このときほど後悔したことはない。

言葉にしなくても伝わる気持ちはある。でも、言葉にしなければ伝わらない気持ちも、当然あるのだ。

はあ、とため息を吐いて、幾斗は亜夢の両手を握る。

「世話の焼ける奴だな」

え、と俯いた顔を上げれば、幾斗は優しく微笑んでいた。

「俺は、いつだってあむと手を繋ぎたいし、腕だって組んでほしいと思ってる。だからあむがそれを望むなら、遠慮しなくていいから」

「……うん」

とくん、と亜夢の心臓が波打つ。幾斗の優しさが、嬉しい。いつか、自然に幾斗と手を握れる日が来るのだろうか。自然に、幾斗の腕に自身の腕を絡められる日が来るのだろうか。

亜夢の努力次第で、それはいつでも叶う。幾斗も、それを望んでいるのだから。



「それにしても、暑いわね」

9月の中旬だというのに、気温は30℃を超えていた。

「アイスでも食うか？」

「そうね」

空海が提案し、小走りでソフトクリームを買いに行く。歌唄は、近くのベンチに腰かけて空海を待っていた。

ソフトクリームを両手に持った空海が、歌唄のところへ歩いてくる。そうして歌唄に一方のソフトクリームを渡して、歌唄の隣に座った。

「これ、あっさりしてて美味しいわね」

空海から手渡されたソフトクリームをひと口食べて、歌唄がそう呟いた。

「それ、パッションフルーツ味。因みに、俺のはほうじ茶味」

「……美味しい？」

「意外に。食うか？」

ソフトクリームを差し出されて、歌唄は、ぺろ、と舌で少し舐めた。

「……意外に、美味しいわね」

「だろ」

にかっと笑って、空海は歌唄に白い歯を見せる。そしてソフトクリームを握っている方の歌唄の手を取り、自分に引き寄せた。

「ホントだ、あっさりしてる。歌唄みてえ」

「どういう意味よ」

自分の手の中にあるソフトクリームを舐めながら、歌唄は聞いた。

「日奈森にはあっさりしてるのに、俺にはすごく甘い」

空海の言葉に一瞬目を丸くし、ふ、と噴き出して歌唄は笑った。

「あたし、空海に甘い？」

笑いながら、歌唄は訊いた。

「俺しか聞けない、甘い声を出すだろ？」

ぼそ、と歌唄の耳元で、空海は囁いた。かぁ、と頬を赤くし、バカ、と呟きながら、歌唄はソフトクリームを舐める。

「……さっきも思ったけど、歌唄がソフトクリーム食べてるのって、なんかエロいよな」

「なによ、それ？」

空海の言葉に、歌唄はソフトクリームを食べるのを止めて、空海を見る。

「舌遣いがさ。最中を連想させる」

「もう、空海……っ」

真っ赤な顔で空海を睨むが、あまり効果はない。ははっと大きな声を出して、空海は笑った。それから歌唄の肩に手を置いて、耳元でそっと囁く。

「今日も聞きたいな。歌唄の甘い声」

「……気が向いたらね」

素っ気なく言うが、それさえもかわいく見えてしまう。本当に、どうしてこんなにかわいいのだろう。

「歌唄、アイスついてる」

「え、どこ？」

ハンカチを取り出して拭こうとしたら、べろ、と空海に口元を舐められてしまった。

「取れた。ご馳走さん」

「もう、空海ったら」

恥ずかしそうに俯いてみせたが、どこかしら、幸せそうな表情でもあった。

「俺も、アイスついてねえ？」

「……ついてないわよ」

「ホントか？ 口とか、ついてるだろ？」

「……」

迷った挙句、歌唄は素早く空海の唇に自分のそれを触れさせた。

「取れたわよ」

満足そうに、へへ、と笑い、空海は立ち上がった。つられて、歌唄も立ち上がる。どちらからともなく手を繋ぎ、2人はまた歩き出した。

そんな2人を遠くから見つめる影が、2つ。

「……ああいうの、無理か？」

「絶対ムリ」

歌唄と空海を見ながら、幾斗は亜夢にそう問うた。答えはわかっていたが、聞くと、やはりため息が出てしまう。

「で、でも……」

幾斗の服の裾を掴み、亜夢は頬を赤らめる。

「頑張る、から。アイスは、まだ無理だけど」

亜夢なりの、精一杯の言葉だ。それがわかり、幾斗は嬉しくなって亜夢を抱き締めた。

「い、く……!？」

「頑張ろうな、一緒に」

一緒に。その言葉が、亜夢には嬉しくて。

「……うん」

亜夢は、幾斗の腕の中で幸せを感じていた。

しゅごキャラ！二次創作

デートにも個人差があります

はなび

E-Mail hanabi7220@gmail.com
URL <https://lycka.cocotte.jp/871/>
Twitter @hanabi7220

- 本書は非公式ファンブックです。原作者さま、出版社さまとは一切関係ございません。
- 本書を無断で複写、転載、転売、オークションで出品等をするのはご遠慮ください。

おうちでつくる同人誌

<https://cweb.canon.jp/pixus/special/room/doujin/>